

■ ドル反撃の局面が訪れるのもそう遠くはない！？

前回更新分の本欄で「ユーロ／ドルがもう一段の上値を試す可能性は十分」と述べたが、実際に先週4日には一時1.2177ドルまで上値を試す場面があった。

同水準は、11月初旬から形成されていた上昇チャネルの上辺に近く（下図参照）、結果的に



押し戻される格好となったことが一つ。むろん、本日の欧州中央銀行（ECB）理事会を控えて、ユーロの一段の上値を追うことは躊躇われるという部分もある。

既知のとおり、今回のECB理事会において追加緩和の実施が決定されることは以前から

確実視されているものの、その具体的な内容に関する市場の予想はまちまちとなっている。

コロナ感染拡大に伴って実施されたロックダウンの効果は認められるものの、その悪影響に対する懸念もないではない。ワクチンの効果に対する期待はあるが、副反応への警戒もある。

欧州連合（EU）と英国の通商交渉が近く合意に至るとの期待は膨らむが、いまだ双方の主張にはかなりの隔りがある。昨日（9日）、ゴープ英内閣府担当相（国務相）は出演したラジオ番組において「EUから何らかの動きがない限り、（合意を確保するのは）非常に難しい」との認識を示していた。やはり、合意なき離脱の可能性は払しょくし切れず、いまだ心配は残る。

とはいえ、EU予算と欧州復興基金に関してはグッドニュースも飛び込んできており、ECB理事会メンバーとしても大いに政策判断に迷うことであろう。よって、追加緩和の実施については、おそらく段階的な対応方針が打ち出されることとなるであろうし、そうなれば目先は一旦「材料出尽くし」となり、あらためてユーロが買い直される可能性もある。

もっとも、先週末までのユーロ／ドルの上昇は、基本的に「ドル安」に因るところが大きかったことも事実。つまり、今後もドル売りの流れが継続するか否かがユーロ／ドルの行方をも左右するということになる。個人的には、そろそろドルの反撃が始まってもおかしくないと思っているのであるが如何であろうか。

まず、先月（11月）に記録的な上昇を演じた米国をはじめとする世界の株価に「上げ一服から暫し調整」の局面が訪れる可能性が高いと見られる。例えば、NYダウ平均のチャート上にダイアゴナル・トライアングル（斜めの三角形）の形状が見て取れる（右図参照）ことも、これまでの強気相場が「一旦お休み」に入ることを予感させるシグナルの一つ。一旦調整入りとなれば、今度はリスク回避のドル買い戻しが生じやすい。

そもそも「リスク選好でドル売り、リスク回避でドル買い」などという単純で浅薄な条件反射の反応が、一旦いつまで続けられるというのであろうか。“ワクチン後”の市場を取り巻く状況が、それ以前とは様変わりすることは間違いない。

ドル／円についても、そろそろ底入れの時期が近づきつつあると個人的には見ている。なおも3月安値を試す可能性は消滅していないが、いずれ21日移動平均線、一目均衡表の日足「雲」などを順に上抜ける場面が訪れると考える。



（12月10日 10:05）